

HEI HATA TEI

幣旗邸古墳 1号墳

大分県中津市大字相原8265-32番地所在遺跡の調査

中津市文化財調査報告第16集

1995

中津市教育委員会

中津市文化財調査報告第16集

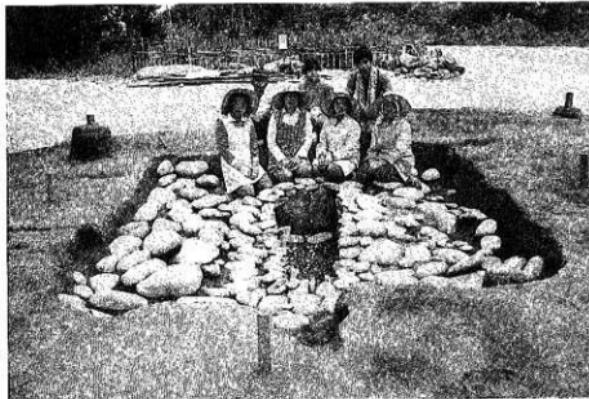
「幣旗邱古墳1号墳」の訂正について

頁	行	誤	正
2		永添遺跡	
3	20	永添1号墳	
	30	永添遺跡	相原山首遺跡
5	註3	永添遺跡	
25	囲1	永添遺跡	

☆ 中津市文化財調査報告第14集「永添遺跡・中津城跡(御用屋敷跡)・ホヤ池窯跡」に、「永添遺跡」「永添1号墳」と書かれているものは、すべて「相原山首」と訂正してください。

例　　言

1. 本書は中津市教育委員会が工場用地整備に伴い事前調査を実施した、幣旗邸古墳1号墳の調査報告書である。
2. 調査は中津宇佐菱光コンクリート工業株式会社の委託を受け、1989年（平成元）4月24日～8月7日まで実施した。
3. 遺構実測は主として栗焼が行ったが、人骨出土状況を田中良之、一部遺構を宮内克巳（大分県教育委員会文化課主任【現主査】）、丸山啓子（大分県教育委員会文化課嘱託【現安岐町教育委員会主事】）の各氏の協力を得た。
4. 本書の執筆および編集は栗焼が行ったが、第Ⅳ章については村上久和氏（大分県教育委員会文化課主任）田中良之氏（九州大学大学院比較社会文化研究科教授）に、また第Ⅶ章は桃崎祐輔氏（筑波大学歴史・人類学研究科）に分析及び執筆をお願いした。
5. 遺物整理は中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子、遺物実測は高崎章子（以上中津市歴史民俗資料館）の協力を得た。
6. 洋書及び遺構、遺物写真撮影は栗焼が行った。なお、調査実施後、報告書の刊行までに7年もの時間を要したのは、ひとえに栗焼の責に帰するものであり、関係各位に対し深くお詫びしたい。
また、調査実施にあたり、終始ご理解とご支援をいただきながら、調査の成果を報告できなかった故、山本万治、松尾馨、八木山治の各氏には衷心よりお詫び申し上げ、併せてご冥福をお祈りする次第である。



調査関係者

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
第Ⅱ章 調査の概要	3
1. 地理と歴史的環境	3
2. 調査の概要	5
3. 調査経過	6
第Ⅲ章 币旗邱古墳1号墳の調査	6
1. 現況	6
2. 規模及び構造	8
3. 墳丘の観察	8
4. 主体部の構造	8
5. 遺物出土状況	11
6. 遺物	11
第Ⅳ章 币旗邱古墳1号墳出土人骨	14
1. 出土状態	14
2. 人骨所見	14
3. 考察	15
第Ⅴ章 币旗邱古墳1号墳出土の家牛 (Bos taurus) 齒・家犬 (Canis familiaris LINNAEUS) 骨	20
1. はじめに	20
2. 出土状態	20
3. 出土牛歯・犬下顎の所見	20
4. 古墳に伴う牛の供犠	21
5. 結語	23
第Ⅵ章 まとめ	24

挿 図 目 次

図1 中津市主要遺跡分布図 (S = 1 / 50000)	2
図2 币旗邱古墳1号墳周辺地形図 (S = 1 / 5000)	4
図3 地形図 (S = 1 / 1000)	4
図4 墳丘実測図及び墳丘土層図 (S = 1 / 100)	7
図5 主体部実測図【第一大墓壙・石室検出状況】(S = 1 / 40)	9
図6 【第一次墓壙】(S = 1 / 40)	10
図7 【石室】(S = 1 / 40)	12
図8 出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	13
図9 人骨出土状況 (S = 1 / 10)	19
図10 家牛歯出土状況【家牛歯を伴う集石遺構】(S = 1 / 20)	19
図11 家牛歯・家犬歯実測図	22

図 版 目 次

図版1 币旗邱古墳1号墳周辺地形 (南側上空より)	
図版2 1; 币旗邱古墳1号墳全景 (調査前)	2; 主体部全景 (南西より)
3; 第二次墓壙及び石室検出状況	4; 第二次墓壙土層断面
図版3 1; 墳丘上層断面 (主体部主軸方向)	2; 墳丘上層断面 (主体部横軸方向)
図版4 1; 石室内遺物出土状況 (余景)	2; 石室内遺物出土状況 (上半)
3; 「瓜状炭化物」出土状況	4; 人骨・遺物出土状況
図版5 1; 石室内 (頭部小口方向)	2; 石室内 (頸部より足尾小口方向)
3; 石室内側面 (南東方向)	4; 石室内側面 (北東方向)
図版6 1; 主体部全景 (埋葬時)	2; 主体部全量 (控え横みの状況)
3; 主体部全景 (接え積み除去後)	4; 主体部全景 (墓壙掘り方)
図版7 1; 家牛歯を伴う集石遺構	2; 家牛歯出土状況
3; 家牛歯	
図版8 1; 出土遺物 (直刀)	2; 出土遺物 (刀子・鏑子?)
3; 出土遺物 (鉄錆1)	4; 出土遺物 (鉄錆2)

第一章 はじめに

1. 調査に至る経緯

幣旗部古墳が確認されたのは1970年（昭和45）、大分県教育委員会が実施した県内遺跡分布調査によってであった。

その後、当時の土地所有者である幣旗軍治氏により手厚い保護が成されていたが1982年（昭和57）幣旗氏の転居に伴い、ここに生コン工場の建設計画が持ち上がった。中津市教育委員会では早急に県教育委員会及び事業者との協議を行い、同年の確認調査で新たに1基の方墳を確認した。協議の結果、事業者の理解を得て從来確認されていた円墳（1号墓）については一部事業計画の変更により現状保存とし、新たに確認された方墳（2号墓）については、記録保存を目的として翌1983年（昭和58）1月24日～2月3日にかけて調査を実施した。調査の結果については調査報告書に詳しいのでここでは改めて述べないが、主体部は竪穴式小石室+割竹形木棺の形式をもち、出土した土師器などから5世紀後半代の時期が考えられている。こうして、中津市内で数少ない墳丘墓である幣旗邸古墳1号墳は、現地保存が決定したのであった。

ところが1988年9月、再び幣旗邸古墳1号墳について、土木工事等にかかる埋蔵文化財調査の有無についての照会が、なされるにいたった。今回の申請では工場整備に伴い、用地ほぼ中央に位置する幣旗邸古墳1号墳が計画上どうしてもネックとなるとして、その調査の必要性を打診して来たものであった。これに対し、中津市教育委員会ではこれまでの幣旗邸古墳の保存に対する経緯と、その重要性を説明し、現地保存を強く要望したが、事業者側と妥協点が見いだせず、調査を実施することで合意に至った。これを受けて、1989年（平成元）4月10日～4月18日にまず確認調査を実施し、4月19日に県教育委員会との再協議を経て、4月20日に発掘調査委託契約を締結した。調査期間は1989年4月24日～5月31日とし、1990年3月31日までに全ての業務を完了するものとした。

しかし、保存状態が良好であったことなどから、現地の調査が終了したのは8月7日であった。

2. 調査体制

調査組織（1989年調査時）は以下のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 武信 元（中津市教育委員会教育長）

調査指導 賀川光夫（別府大学文学部教授）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

調査事務 石井邦弘（中津市教育委員会市民文化センター館長）

竹下 力（中津市教育委員会市民文化センター文化・会館係長）

八木山治（中津市教育委員会市民文化センター嘱託）[故人]

田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター主任）

渡辺明美（中津市教育委員会市民文化センター臨時職員）

調査担当 栗焼憲児（中津市教育委員会市民文化センター主任）

調査員 宮内克巳（大分県教育委員会文化課）

九山啓子（　　〃　　）

なお、現地で下記の方々より有益なご指導及び助言を得た。記して謝意を表する次第である。

後藤宗俊、清水宗昭、渋谷忠章、村上久和、小林昭彦、後藤一重（大分県教育委員会）

高橋章、飛野博文（福岡県教育委員会）吉留秀敏（福岡市教育委員会）[所属は全て調査時]



図1 中津市主要遺跡分布図 (S = 1 / 50000)

- | | | | | |
|------------|----------|-------------|-----------|------------|
| 1. 幣旗邸古墳群 | 2. 永添遺跡 | 3. 上ノ原横穴墓群 | 4. 三口遺跡 | 5. 勉助野地遺跡 |
| 6. 佐知遺跡 | 7. 相原廃寺 | 8. 佐知久保畠遺跡 | 9. 市場遺跡 | 10. 金居塚古墳 |
| 11. 檜生山古墳 | 12. 西方古墳 | 13. 金居塚横穴墓群 | 14. 山田古墳 | 15. 穴ヶ葉山古墳 |
| 16. 亀山古墳 | 17. 垂水廃寺 | 18. 百留横穴墓群 | 19. 土佐井遺跡 | 20. 能満寺古墳群 |
| 21. 小石原泉遺跡 | 22. 桑野遺跡 | 23. 牛頭天王遺跡 | 24. 上桑野遺跡 | 25. 尻高畠遺跡 |

第Ⅱ章 調査の概要

1. 地理と歴史的環境

中津市の主要な地形を構成するのは、山国川によって開拓された沖代平野（沖積平野）と、通称“下毛原台地”（洪積台地）であり、山林面積は極端に少ない。周防灘に面した本地域は、広く豊前平野に含まれ、沖代平野はその一角を構成する。常陸邸古墳はこの沖代平野の南端、標高36m程の下毛原台地上に位置し、西側に接する山国川との比高差は25m程で、沖代平野を一望し遠く周防灘を眺望することができる。

周辺の遺跡については、近年開発行為の増加により多くの遺跡が確認されており、ここでは本遺跡と関連のある古墳時代の状況を中心述べる。

山国川を挟んで対峙する福岡県築上郡（旧上毛郡）と本地域（旧下毛郡）は、古く三毛郡（みけのこおり）と呼ばれ、本来同一の地域を構成していたと考えられている。その後上毛・下毛に分かれるが、その時期については明確でない。しかし大宝二年（702）の『正倉院文書』には「豊前國上毛郡塔里」ならびに、「加自久也里」の戸籍が残されており、少なくともこの時期には分かれていたものと考えられる。このように両地域は古来より密接な関係にあったと考えられることから、ここでは包括してその動向を見て見たい。

從来、本地域には前方後円墳の分布は確認されていなかったが、近年相次いで2基の前方後円墳が確認された。いずれも上毛側で、下毛原台地に対峙する洪積台地の縁辺部に構築されている。一つは能満寺3号古墳（大平村）で、全長35mを測り、能満寺1号古墳（円墳）、能満寺2号古墳（方墳）を含め4世紀前半代の首長層の変遷を見せる。もう一つは西方古墳（大平村）で、復元長で全長55m余りを測り、能満寺3号古墳よりもやや後出ながら、4世紀代の首長墓と考えられている。

5世紀代の墳墓としてはまず下毛側で永添1号墳（中津市）が上げられる。墳丘径18mを測る円墳で張り出しをもつ。5世紀中頃と考えられ、一連の永添遺跡の墳墓群に先行する首長墓とされる。上毛側では近年の調査結果から、櫛生山古墳（吉富町）が前方後円墳としての可能性を指摘されている。この他、勘助野地遺跡、常陸邸古墳2号墳等（中津市）がみられ、箱式石棺、石蓋土塚も地域的な分布をみせる。なお下毛側で注目されている中津市の亀山古墳（昭和38年頃消滅）は、明確に前方後円墳とする資料が得られておらず、時期、規模等容的な複雑性を欠く。

6世紀代には多くの墳墓の構築が認められ、両地域とも丘陵地帯を中心とした分布が認められる。量的に優位性を見せるのは上毛であり、大平村では丘陵地帯の至るところでその分布を見ることができる。中でも金居塚古墳（大平村）は20基余りの円墳によって構成され、本地域では最大規模を誇る。また、穴ヶ葉山古墳（太平村）は線刻画を有するものとして著名である。

7世紀代には下毛側に傑出した例が見られる。永添遺跡がそれで、7世紀前半から9世紀前半に至る極めて企画性の高い方墳が、火葬墓への変遷を見せながら整然と台地上に配置されていた。こうした例は明らかに地域の首長層の変遷を物語るものであり、この時期に下毛と上毛の力関係に逆転が生じたのかもしれない。実際、上毛側ではこの時期の墳墓としては土佐井遺跡（大平村）黒部古墳6号墳（豊前市）等が見られるに過ぎない。

他方、横穴墓としては上ノ原横穴墓群（中津市・三光村）が代表的である。調査の結果5世紀後半～6世紀にかけて大きく3時期におよぶ造営活動が認められ7世紀まで追葬等の埋葬行為が認められている。この上ノ原横穴墓群に正対するように金居塚横穴墓群（大平村）が見られ、その他にも6世紀代を中心として多くの横穴墓が分布する。

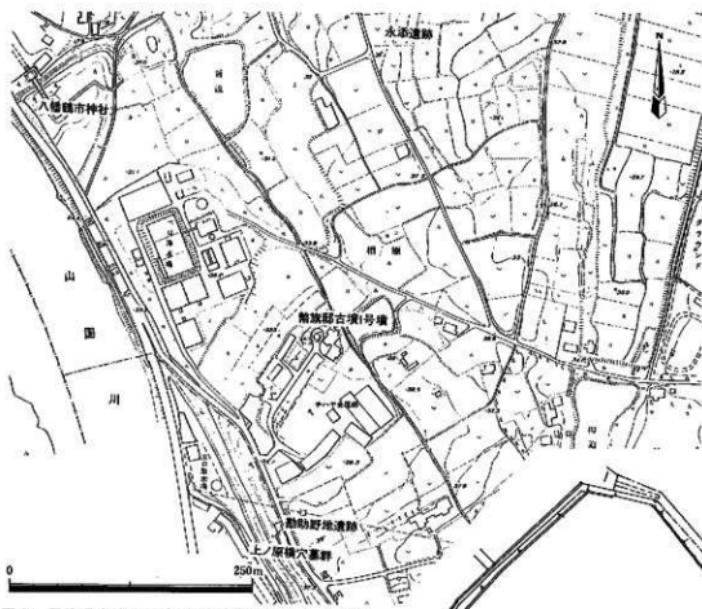


図2 帯旗部古墳1号墳周辺地形図 (S = 1 / 5000)

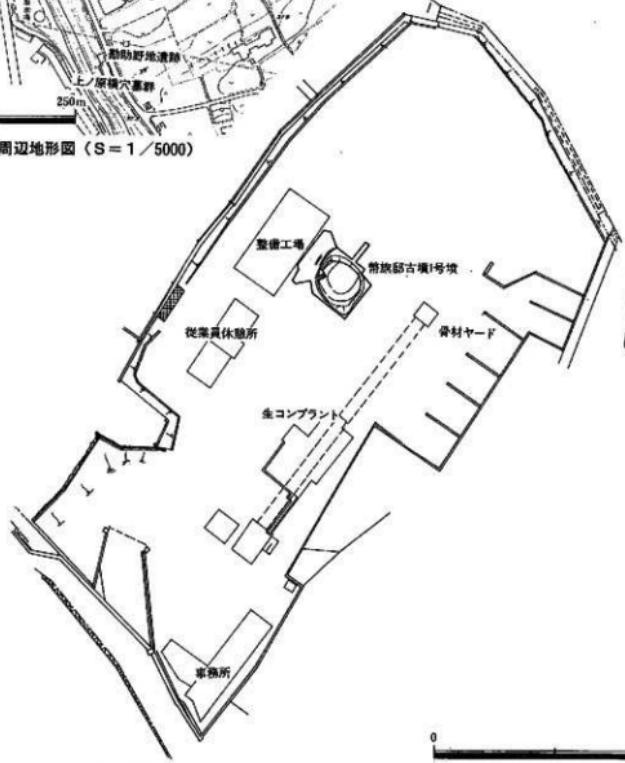


図3 帯旗部古墳1号墳地形図 (S = 1 / 100)

集落については下毛側で調査が進んでおり、主なものとして中須遺跡、前田遺跡第2地点、市場遺跡、大丸川流域遺跡群第4地点、大坪遺跡、三口遺跡（以上、中津市）佐知遺跡、佐知久保畠遺跡（以上、三光村）がある。これらはいずれも6世紀後半～7世紀前半であるが佐知遺跡については5世紀後半の良好な資料が見られる。上毛側でも近年いくつかの良好な遺跡が調査されており、5世紀代の集落を含む池の口遺跡（新吉富村）、荒堀中ノ原遺跡、小石原遺跡（豊前市）などがある。これらはいずれも6世紀及び7世紀前半にかけて大規模集落を構成しており、前述の古墳群を支えた勢力と思われる。

以上、古墳時代を中心として関連する遺跡について、その概要を述べた。

註1 大平村教育委員会「能満寺古墳群」（『大平村文化財調査報告書』第9集、1994）

註2 註1と同じ。

註3 中津市教育委員会「永添遺跡・中津城跡（御用屋敷跡）・水や池跡」（『中津市文化財調査報告書』第13集、1993）

註4 吉富町教育委員会「椎生山古墳」（『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991）

註5 大分県教育委員会「勤知野地遺跡」（『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告（1）』、1988）

註6 中津市教育委員会「常磐郡古墳」（『中津市文化財調査報告書』第3集、1984）

註7 大平村「大平村誌」（1986）

註8 註1と同じ。

註9 大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」（『大平村文化財調査報告書』第3集、1985）

註10 註3と同じ。

註11 大平村教育委員会「土佐井地区遺跡」（『大平村文化財調査報告書』第6集、1990）

註12 玄洋開発株式会社「黒部古墳群」（1979）

註13 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群I～III」（『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告（2）～（4）』、1989～1991）

註14 註1と同じ。

註15 中津市教育委員会にて調査。現在整理中。

註16 大分県教育委員会「佐知遺跡」（『大分県文化財調査報告』81輯、1989）

註17 植田由美氏（三光村教育委員会）のご教示による。

註18 池辺元明氏（福岡県教育委員会）のご教示による。

註19 豊前市教育委員会「豚巣面塗壁事業に伴う埋蔵文化財調査報告」（『豊前市文化財調査報告書』第7集、1991）

註20 豊前市「豊前市史」（上巻、1991）

2. 調査の概要

調査はまず墳丘頂にセンターポイントを設け、これを基準として土層確認を目的とした十字トレントを設定した。そしてまず、表土の除去を行い土層の確認及び、主体部掘り方の検出を試みながら掘り下げを進めた。

その結果、表土下約30cm程で楕円形を呈する掘り方を確認したため、これを墓壙と考え調査区を拡張し、上層確認のため半裁し掘り下げを行ったところ、墳丘下1.0mで石蓋を検出した。

ところが、この石蓋の周囲に連続性をもつ河原石が同時に検出されたため、土層確認トレントを同レベルまで掘り下げたところ、この墓壙の外側にさらに地山から掘り込まれた方形の墓壙が存在することが明らかとなった。

このため、まず当初の墓壙について記録を行い、石蓋をあけて石室内の状況を確認したところ、内部には一体分の人骨と、副葬品として直刀、鐵鎌、刀子等が確認できた。その後土層ベルトを残しながら地山面まで墳丘の掘り下げを行ったところ、幅3.3m×縦3.75mの方形を成す墓壙を検出した。墓壙内は中央に石棺を配し、これを取り囲むように人頭大の偏平な河原石を全面に敷き詰めており、竪穴式石室を想起させる状況であった。

その後全体の記録を作成し、さらに周辺で旧石器時代遺物の存在が確認されていたため、この検出を目的とした調査を、グリッドを設定して実施し、全ての調査を終了した。

3. 調査経過

調査は1989年（平成元）4月10日～18日に確認調査を実施し、4月24日～8月7日にかけて本調査を実施した。当初5月31日までの調査期間を設定したが、予想以上の石室規模をもつことが判明したため、事業者側に調査期間の変更を申し出、最終的に2カ月余りの延長となった。以下日を追って調査経過を示す。

確認調査

- 4月10日 機材搬入。墳丘に十字トレンチを設定し、土層及び主体部の確認を開始。
11日 墳頂部に4.0×4.0mのグリッドを設定し、主体部の確認を行う。その結果1.0×1.5mの楕円形の落ち込みを確認。墓壙か。
12日 落ち込みに沿って石列を確認。河原石積の石室を予想させた。
19日 県教育委員会と再協議。本調査の実施を確認。

本調査

- 4月25日 調査開始。
5月 8日 周溝確認。
15日 墳丘十字トレンチで、墓壙と思われるラインを確認。
31日 主体部石蓋を確認。
6月 7日 石蓋をほぼ検出。
9日 土層で墓壙の掘り込みラインと、古墳構築時の墓壙掘り込みラインを確認。追葬が行われたとの見方を強める。
19日 石蓋を実測後開く。人骨、直刀、鉄鎌等を確認。
21日 人骨取り上げ。
26日 墳丘掘り下げ開始。
7月 5日 墳丘の地山面までの掘り下げ終了。古墳構築時の墓壙ラインを確認。
11日 墓壙掘り下げ終了。墓壙は3.3×3.75m程のほぼ正方形のプランを有し、全面に人頭大の偏平石を敷き詰めている。
18日 旧石器時代遺物確認のためグリッド設定掘り下げ。
20日 石室実測作業開始。
31日 石室実測作業終了。
8月 4日 墓壙完掘。実測。
7日 地形測量。機材撤収。調査終了。

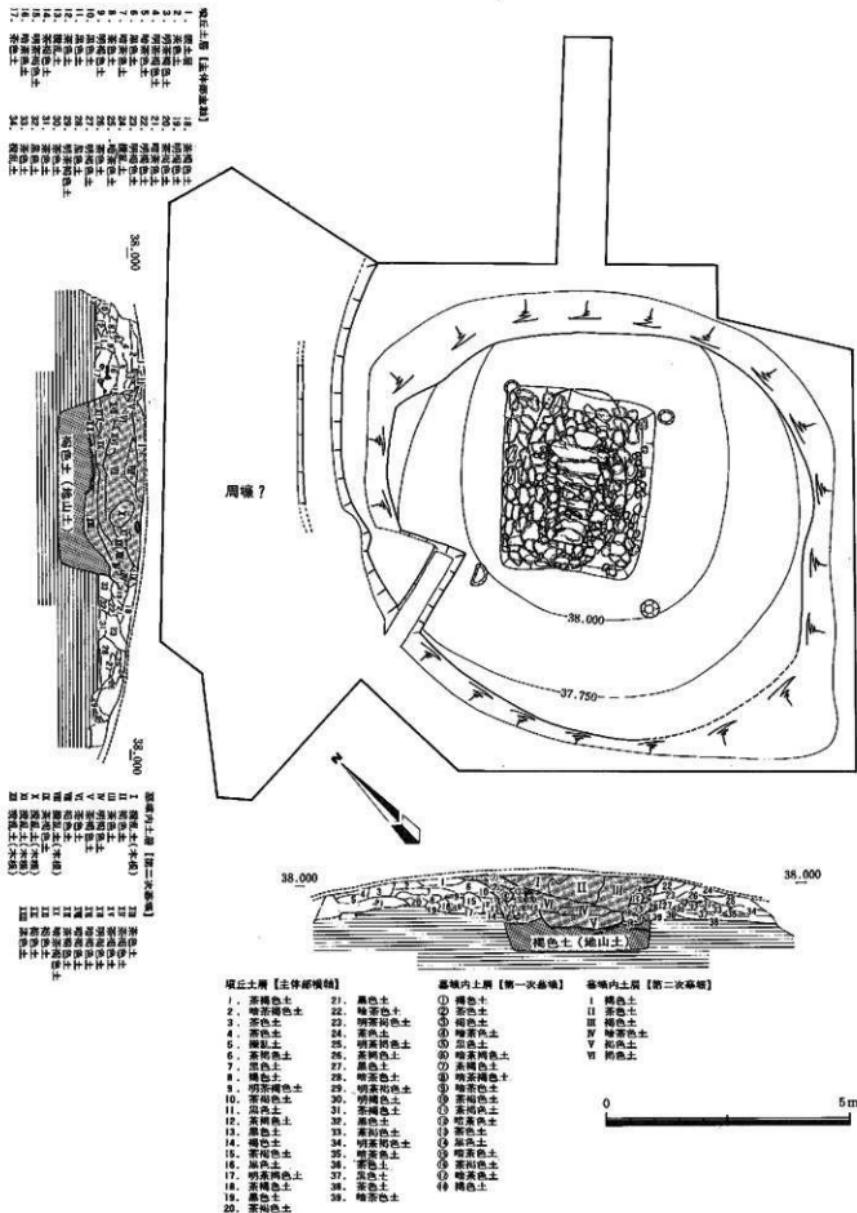


図4 布旗郭古墳1号墳墳丘実測図及び墳丘土層図 ($S = 1/100$)

第III章 幣旗邸古墳1号墳の調査

1. 現況

幣旗邸古墳1号墳は標高36m余りの、沖代平野を一望する洪積台地上に位置する。発見及び、保存に至った経緯については前述のとおりであり、ここでは改めて触れないが、現況は墳丘のみが辛うじて残されていた程度である。前回の工場建設に際し古墳の保存は行われたものの、墳丘の裾部分はかなり削平を受けしており、また周溝部分についてはコンクリートで完全に覆われていた。さらに墳丘の裾部分の一部では、コンクリートおよび河原石によって保護施設が造られており、こうした行為も、結果的には墳丘の保全に良い影響は与えていない。

2. 規模及び構造

前回の2号墳の調査の際確認されていた周溝は、工場用地造成に伴いほとんど削平されており、今回の調査では確認できなかった。墳丘の規模は現況で直径9.5mあまり、高さ1.2mであり、削平されている状況と、前回調査時の実測図より推定した原形は直径20m余り、墳丘頂1.5m程度であったと思われる。

3. 墳丘の観察

主体部を中心とした十字の十層セクションの観察と、墳丘の削平過程で知り得た知見をもとに、墳丘の構築状況及び、埋葬に伴う行為の痕跡について見て行きたい。

墳丘の構築にあたっては、予め旧表土を削平した後主体部のプランニングが行われ、地山を掘り込み石室の構築が行われている。その後墳丘の構築が行われ、盛土は基本的に黒色土、茶褐色土、褐色土を一定のブロック単位で一見不規則的に、しかし部分的には規則的に交互に盛り上げている。そして、ある程度墳丘の構築を行った時点で埋葬行為が実施され、更に盛土を施すことによって全体の整形を行ったものと考えられる。これを東西セクションで見るとこの様子がよく伺え、主体部墓壙ラインが地山から墳丘へと連続していることが分かる。ただ、墳頂まで及んでいたかどうかは不明で、墳丘を整形するため更に盛られたものか、そのままであったか断定はできない。

一方、南北セクションの土層を見ると、墳頂から主体部墓壙ライン内側、つまり石蓋に向かって掘り込まれた別のラインを認める事ができる。これは平面的にも確認されており、当初はこのラインが主体部の構築に伴うものと考えられたが、前述のように最終的に主体部墓壙とともになうラインが確認されたことによって、その解釈が問題となった。したがって、便宜上前者（外側）を第一次墓壙ライン、後者（内側）を第二次墓壙ラインと称しておく。

ところで、第二次墓壙ラインの南側に沿うようにして集石遺構が確認されている。当初はこれが主体部とも考えられたが、集石遺構の石の間から牛歯が検出されたことによって、埋葬行為に伴う祭祀遺構であると判断された。詳細については後述の通りである。なお墳丘内の地山に近いレベルでは、人頭大の河原石が不規則に散在する形で混入されていた。

4. 主体部の構造

主体部は“石棺系竪穴式石室”とも称すべきものであり、その構造は極めて地域色の強いものである。全体的には墓壙全面に人頭大の偏平な河原石を敷き詰めており、その中央に箱式石棺を配する。しかし、全面に敷き詰められた河原石は墓壙底面にまで及ぶものではなく、箱式石棺周辺の裏込めを除けば、墓壙表面を装飾するごとく配されている。その構築過程は、調査時の所見からすれば以下のとおりである。

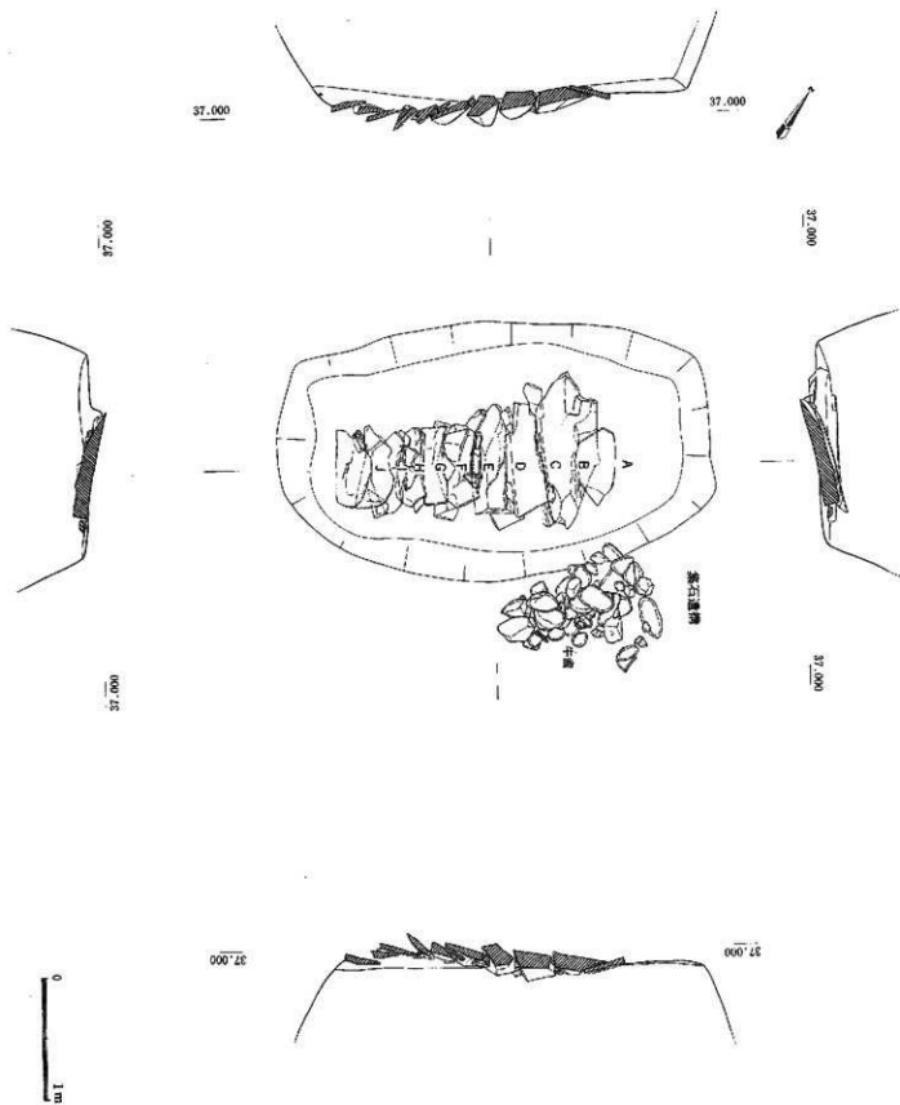


圖5 常旗鄉古墳1號墳主體部實測圖〔分二次墓槨、石室陪出狀況〕($S = 1/40$)

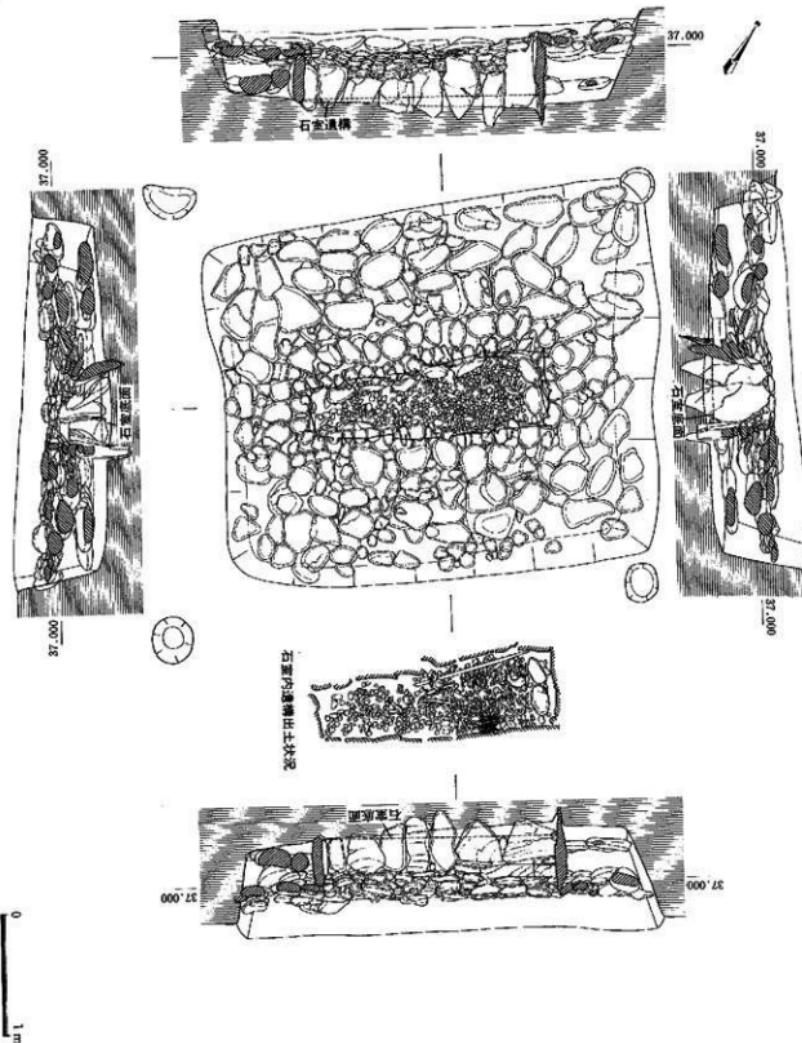


图6 带旗邵古墳1号墳主体部実測図〔第一次墓塚〕(S=1/40)

まず、前述のとおり当初の墓壙は旧表土を除去した後に掘り込まれており、その規模は地山面で縦3.78m、横3.30m、深さ0.75mである。次に、墓壙中央に板状石及び、偏平な河原石を用いて縦1.90m、横0.60m、深さ0.55mの箱式石棺を構築し、床には全面に玉砂利を敷き詰め、頭位に楕円形の河原石を二つ並べて右枕としている。墓壙床面にはこの箱式石棺を囲むように、人頭大の偏平な河原石を楕円形に配する。箱式石棺の裏込めは拳大の河原石を用い、俵積で入念に行われており、外側を底部から上端まで二重に取り巻きながら、規則正しくなされている。そしてこの裏込めを更に補強するようにして、人頭大の河原石が石棺頂部から墓壙底面に向かって、ゆるやかに傾斜しながら積まれており、この後墓壙全面に土を充填して、最後に墓壙上面を河原石で覆い、主体部の構築を完了している。

こうして、主体部の構築がなされた後埋葬が行われ、10枚の鉄平石を鏡重ねで並べ蓋をしている。蓋の隙間は小ぶりの鉄平石を用い埋めているが、粘土による目張りなどは行われていない。

5. 遺物出土状況

石棺内からは人骨、鉄器、植物遺存体が出土した。人骨は一体分で、詳細は別稿の通りである。鉄器は直刀1、鐵鎌21、刀子1、鏃子?1、不明鉄器1が出土した。直刀は石棺右側側壁に沿って置かれ、直刀の中程左横に刀子が置かれていた。鏃子?は刀子の左隣りに、そして鐵鎌は石棺右側中程の側壁に沿って一括して置かれていた。植物遺存体は「瓜状炭化物」と思われ、ヒヨウタン状のくびれをもち、直刀と右大腿骨の上にまたがるようにして置かれていた。

6. 遺 物

直刀は長さ98.1cmで、茎には5つの目釘孔を見ることができる。刃部長80.3cm、刃幅1.0cm、刃部厚0.1cmを測る。部分的に木質を残し、保存状態は比較的良好である。鐵鎌はほとんどが範被片刀箭式鎌で、No.16のみが範被片丸造鑿前式鎌である。平均で全長14.40cmを測り、復元推定値を含めた平均は15.24cmとなる。また、いずれも平均値で範被長8.05、茎長5.0cmを測る。刀子は全長11.3cmで、茎長4.3cmを測り、茎部に若干の木質を残す。鏃子と思われる鉄製品は一部欠損するが、全長6.9cmを測る。

鉄鎌計測表

No.	型 式	全 長	刃部長	刃部幅	刃部厚	範被長	茎 長	備 考	単位: cm
1	範被片刀箭式鎌	16.6	2.4	0.8	0.3	8.5	5.5		
2	#	18.0	2.5	0.8	0.3	9.7	5.7		
3	#	13.4	3.2	0.8	0.2	6.6	4.1		
4	#	17.5+α	2.2+α	0.7	0.2	7.9	7.3		
5	#	13.6+α	2.5+α	0.8	0.2	6.7	4.4+α		
6	#	11.4+α	2.4+α	0.7	0.2	7.8	1.1+α		
7	#	13.3	2.7	0.8	0.2	6.6	4.1		
8	#	16.4+α	2.1+α	0.8	0.2	8.8	5.3		
9	#	14.4	2.8	0.7	0.2	7.3	4.5		
10	#	17.7+α	2.3+α	0.8	0.2	9.5	6.0		
11	#	14.6	2.2	0.6+α	0.2	8.0	4.3		
12	#	13.0+α	2.0+α	0.7	0.2	8.5	2.5		
13	#	15.5	2.0	0.6	0.2	7.9	5.4		
14	#	16.3	2.5	0.7+α	0.15	8.1	5.4		
15	#	13.2	2.5	0.5+α	0.2	7.0	3.6		
16	範被片丸造鑿式鎌	15.9	2.4	0.9+α	0.1	7.5	5.9		
17	範被片刀箭式鎌	8.8	2.3	0.6	0.2	9.0	2.6+α		
18	#	12.9	2.1	0.7	0.3	9.2	1.4+α	茎部のみ	
19	?						5.7+α	茎部のみ	
20	範被片刀箭式鎌	12.5	2.4	0.7	0.3	9.0	1.0+α		
21	#	14.7+α	1.9	0.6	0.2	7.4	5.3+α		
平 均 値		14.1+α	2.37	0.715	0.21	8.05	4.338		

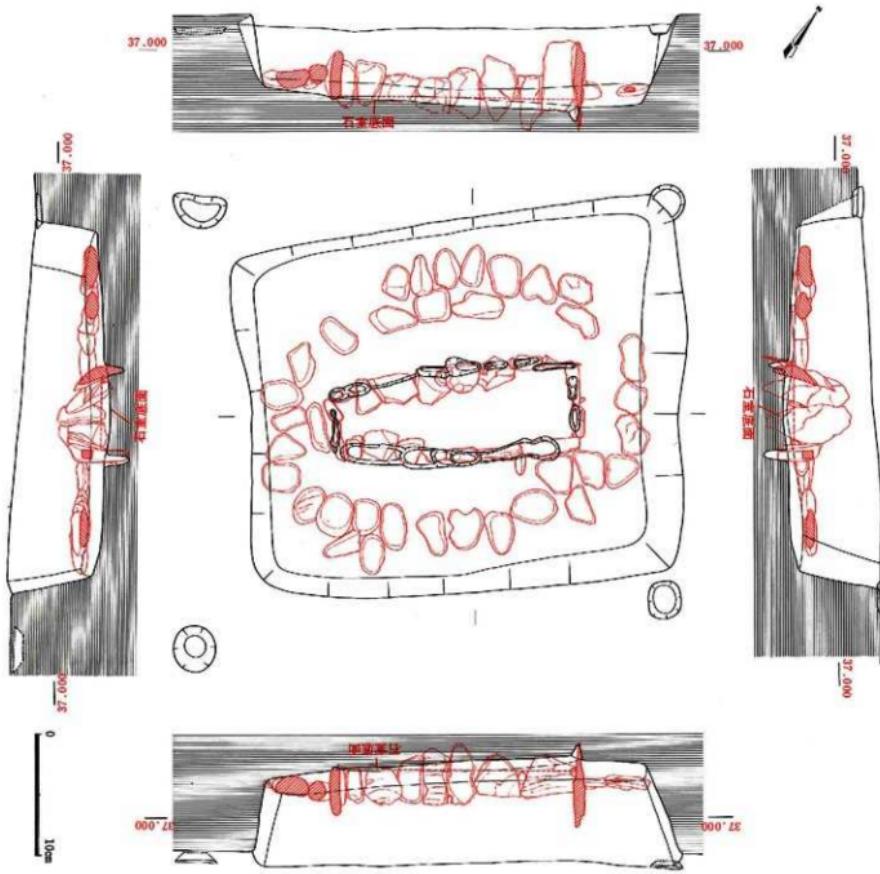


図7 布旗部古墳1号墳墳主体部実測図〔石室企画、段階〕(S=1/40)

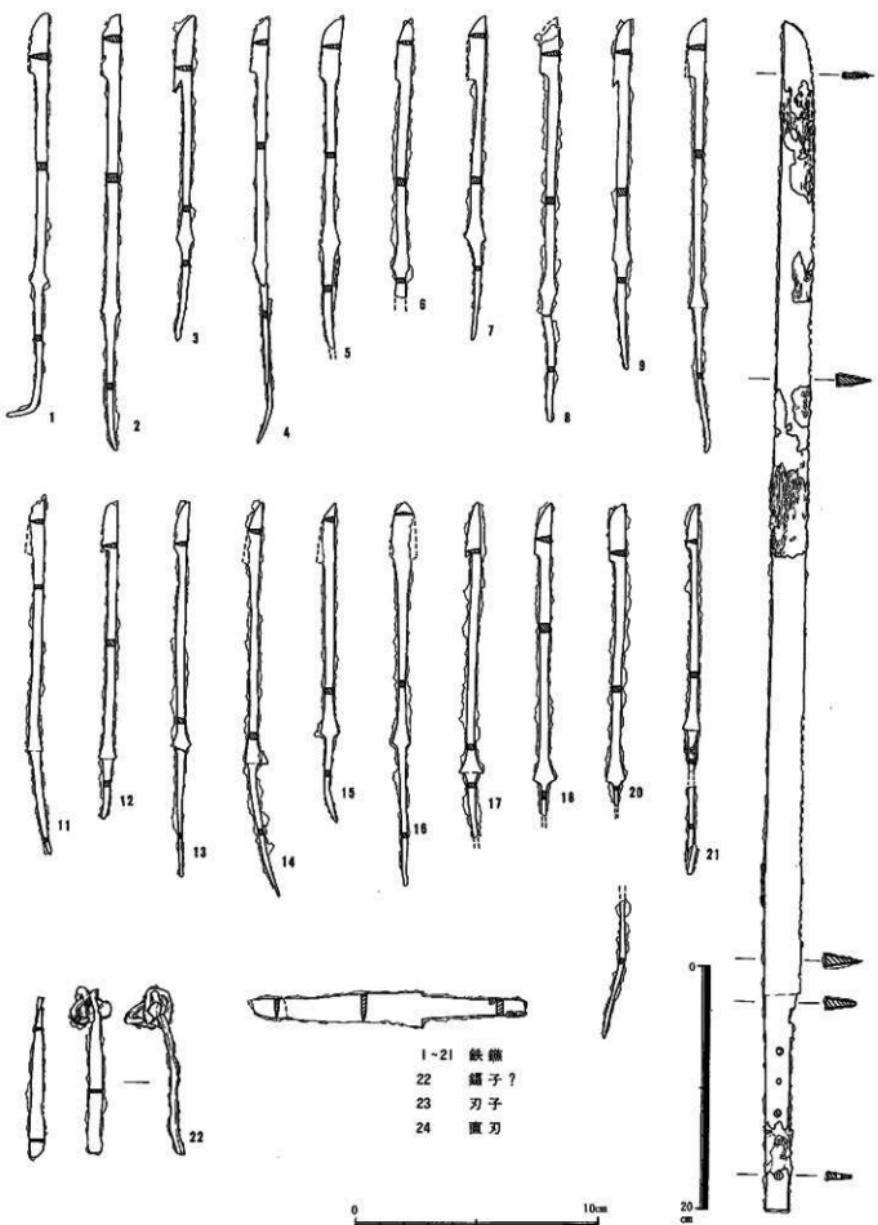


圖8 帶旗邱古墳1號墳出土遺物測量圖 (S=1/2)

第IV章 幣旗邸古墳 1号墳出土人骨

田中良之・村上久和

1. 出土状態(図5、9)

人骨は、石室内に1体だけが葬られており、保存はそれほど良くない。仰臥の伸展葬で、体の右脇に直刀、左に鉄鎌群を副葬する。なお、鉄鎌群の近くには矢筒の一部と思われる皮質も残存していた。さらに、右大腿骨から直刀にかけてはヒョウタン状のくびれをもつ植物遺存体が検出された。

頭骨は、石枕から転落し、一回転して後頭骨が胸部側に位置する。上肢は、左が上腕骨のみ遺存する。右上腕骨は小片が直刀下にあり、前腕は上腕に直交する。これらから、右腕を直角に曲げて腹部にのせた姿勢であったと考えられる。

下肢は、骨盤の左右腸骨の一部が遺存していたが、双方の大半骨切痕の位置関係からみて、原位置のままとみなされる。大腿骨は、膝を接するように遠位の間隔が狭まっており、左右とも骨体から推定される骨頭の位置は、同様に腸骨から推定される寛骨臼の位置に重なる。したがって、左右とも大腿骨は、骨盤との関節状態のままであり、二次的な移動はないと考えられる。

下腿は、左脛骨上に右脛骨が交差するかたちでのっており、左右とも近位端の位置が、推定される大腿骨遠位端の位置からは大きく離れている。すなわち、膝関節は本来の状態ではなく、左右脛骨を二次的に動かした形跡があるのである。

これらから、幣旗邸1号墳においては、堅穴式石室築造後、被葬者を石室に埋葬し、墳丘を完成させた後、一定の期間をおいて再び墳頂部から掘り込んで蓋石を開け、遺体の腰骨を交差させたということになる。そして、この推定は土層所見と矛盾するものではない。さらに、後述する上ノ原48号横穴墓の例から考えて、ヒョウタン状の植物を供献したもの、この段階であった可能性は高い。

2. 人骨所見

全体に保存状態はそれほど良くない。調査時には原形をとどめていても、取り上げから整理の過程で崩壊した部分もあり、ある程度の形状がうかがえるのは頭骨と下肢骨に限られる。以下部位ごとに記載する。

(1) 頭骨 前頭骨左上半部、左右頭頂骨、後頭骨(ラムダから大後頭孔にかけての一部)、右側頭骨(鼓室部から鱗部の一部)が遺存しており、他には下顎骨の一部破片や、顔面頭蓋と思われる小片も認められた。冠状縫合、矢状縫合、ラムダ状縫合は内板、外板とも開離する。

下顎骨は、左第1大臼歯が植立した状態で歯槽骨が遺存していた他は小片となっていた。

ただ、歯牙は比較的よく保存されていた。残存歯式は以下のとおりである。

(M ³)	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ₂	I ¹	/	/	/	P ¹	P ²	M ¹	M ²	(M ³)
(M ₃)	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	I ₁	/	/	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	(M ₃)
.

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 / 欠損 △歯根のみ · 遊離歯 () 未萌出

これらの咬耗度は、上下の第1大臼歯がBrocaの1度であった他は0~1度であり、第3大臼歯は上下とも全く咬耗していない。また、上下の第2大臼歯遠心側および第3大臼歯近心側に側方咬耗がないことからみて、第3大臼歯は未萌出であったとみられる。なお、う歯など頗る病変は認められなかった。

- (2) 上肢 左上腕骨および右前腕骨が遺存していたが、いずれも細片化しており、復元・観察とも不能であった。
- (3) 下肢 骨盤は、左右の腸骨が遺存していたが、取り上げ後細片化して復元不能であった。出土時は左寛骨・大坐骨切痕付近が遺存していたが、現場でも切痕角は観察しえなかった。
- 大脛骨・脛骨は、左右とも骨体部のみであるが、比較的保存状態は良い。ともに著者な印象を受けるが、右大脛骨近位端は骨頭が遊離していたことを示す。

以上から本人骨は第3大臼歯の未萌出、大脛骨頭の遊離からみて、若年の個体であったことが知られる。ただ、若年とはいっても、歯牙咬耗からみて後半期に属すると考えられる。性別については、副葬品（直刀・鉄鎌）からみると男性であった可能性は高かろうが、人骨からは若年のため判定しれない。また、計測値については、若年であるため歯冠計測値のみを以下に示す。

上顎	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²
	r	r 1	r 1	r 1	r 1
近遠心径	8.0	7.2 7.1	6.8 6.8	10.5 10.5	10.3 10.2
頬舌径	-	9.3 9.1	9.3 9.1	11.0 11.0	11.1 11.1

下顎	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂
	1	r 1	r 1	r 1	r 1
近遠心径	7.5	6.8 6.9	7.0 7.3	11.8 11.5	10.9 11.0
頬舌径	-	7.7 7.6	8.0 8.0	10.6 10.3	9.8 10.0

3. 考 察 (図4、9)

幣旗邸古墳1号墳は、堅穴式石室に若年の1体のみが葬られていた。人骨の右半身にそって直刀・刀子、左側に鉄鎌群がある。主体部が堅穴式石室で単体埋葬であることから、これらだけみると一般的にみられる前半期の単体埋葬の事例と思われる。ところが、墳丘の土層調査では、埋葬後、墳丘で被覆した後にもう一度墳頂から掘り込んだ痕跡が確認されている。また、人骨の出土状態から、被葬者が骨化した後に左右の脛骨が二次的に動かされたことがうかがえた。したがって、これから被葬者を石室内に葬って墳丘で被覆し、しばらくの日時をおいて再び掘り返して蓋石を開け、被葬者の脛骨を動かしたと推定されるのである。

このような行為は、完成した墳丘をもう一度掘り返している点からみても、明らかに意図的なものであり、その目的について関心がもたれるところである。人骨の二次的移動がこれに付随している点も興味深い。そして同様な例は、本古墳に隣接する上ノ原横穴墓群に認められるのである。

大分県中津市と下毛郡三光村にまたがる上ノ原横穴墓群は、5世紀から6世紀代の埋葬遺跡である(大分県教委 1990-1993)。われわれのうち、村上はこの横穴墓群の調査主任であり、田中は現場の段階から人骨の調査に携わった。この遺跡における同様の事例は以下に記すが、議論の詳細は別稿(田中・村上 1994)を参照していただきたい。

まず48号墓であるが。これは上ノ原横穴墓群では最古期の形態をもち、5世紀後半に比定される。長さ2.5m幅1.5~1.65mの前部をもつ横穴墓で、玄室は長さ1.3m最大幅2.2mの平面橢円形を呈する。天井はドーム状をなし、中央部付近で0.67mと、かなり低い。

玄室内からは人骨1体がほぼ完全な状態で検出された。被葬者の右手の先には鉄錐1、左肩近くに刀子1が副葬されている。そして、頭の右横と、左足の外側に「瓜状炭化物」が供えられていたのである。

前庭部の土層は、初葬時の埋土と、それを切り込んだそれ以降の埋土が確認された。開口前に、前庭部上層の所見から当然複数埋葬が予想され、しかも初葬時埋土の上面がやや黒色化（灰褐色）していたことから、少なからず時間をおいた追葬が予想された。しかし、中の入骨は1体のみであり、じつに意外であった。したがって、土層所見からみると、埋葬後何らかの目的で前庭部を掘り返し、再度閉塞部を開けたことが考えられたのである。

墓室内の人骨は、老年男性の1体のみであった。狭門からみて右に頭位をとる仰臥伸展葬である。頭を右に傾け、上下肢ともまっすぐに伸ばした姿勢である。人骨の保存はきわめて良好であるが、肋骨片と中足骨が右大脛骨の近くにまで動いており、また左肋骨と胸骨および右肋骨の一部に大きな乱れが認められる。これらのうち、右大脛骨近くの肋骨片と中足骨は、いずれも小さなものであり、落石か小動物による移動とも考えられる。しかし、胸部には落石ではなく、乱れ方も左肋骨を右肋骨の上へとはねのけたような状態であり、肋骨そのものは破損していない。

ところで、左右の膝関節をみると、左は落石による破損のため不明であるが、右は大腿骨・脛骨・腓骨で構成する諸関節が全く乱れていないにもかかわらず、膝蓋骨を欠いている。そして、この右膝蓋骨は、玄室内の別の場所で検出された。

「瓜状炭化物」として報告された、ヒョウタン状のくびれをもつ遺物は、2個が検出された。1個は頭の右横、もう1個は左足の足元に置かれていた。とくに後者は、鹿角製品の上に置かれたものであったが、右膝蓋骨はこの足元の「瓜状炭化物」の直下から検出されたのである。膝蓋骨は大きい骨ではないので、小動物に運ばれた可能性も考慮すべきであろう。しかし、右膝関節に全く乱れがなく、「瓜状炭化物」の直下という検出状況からみて、人為的であることは疑いをいれない。そして前記のように、人骨の出土状態は、左肋骨が右肋骨上にはね上げられ、胸椎・胸骨も乱れており、これらの関節を固定していた靭帯は、ある程度は腐朽した状態であったこと、膝蓋骨の移動も、膝関節付近の軟部組織が腐朽していたことを示している。

したがって、以上から、48号横穴墓では埋葬後、遺体の軟部組織がある程度腐朽してしまうまでの期間を経て、再び閉塞部を開け「瓜状炭化物」を供献したものと推定される。そして、足元に置くにあたって、右膝蓋骨を遺体から抜き取って、その周りに鹿角製品を配置し、その上に「瓜状炭化物」を置くという行為を行っている。これは明らかに意図的の行為である。また、胸部の人骨の乱れについては、頭の右横に「瓜状炭化物」を置こうとすれば、横穴の天井が低いためどこかに片手をつく必要があり、遺体の左胸部がその場所に選ばれた可能性がある。その場合は、膝蓋骨の移動とは異なり、偶発的結果として遺体を乱してしまったことになろう。

「瓜状炭化物」については、実際にはヒョウタン状のくびれをもっており、幣旗邱古墳1号墳出土のものと大差はない。これらを調査した粉川昭平によれば、種の同定は不能であったが、内部に種子は検出されておらず、果実の実質を思わせる構造も検出されなかった（粉川1993）。したがって、種子を含めて中身を取りだした、中空のものであったことがわかる。したがって、形状からみて、容器としてのヒョウタンとみて大過なからう。

以上の上ノ原48号横穴墓の事例からみれば、幣旗邱古墳1号墳のヒョウタン状植物も再開口時におかれただ可能性は高い。そして、これが容器としてのヒョウタンであるとすれば、墓室内に飲物あるいは食物が供献されたのは、埋葬後しばらくたってからという場合があったことになろう。そして、そのとき遺体の

一部とくに脚部を二次的に動かすことがあった。このような行為を示唆する事例は他にもある。

5世紀後半の横穴墓である34号横穴墓は、人骨の保存は不良であったが、現場における遺存人骨から単体埋葬であったことが確認されている。そして、前庭部土層の観察所見は、埋葬後もう一度開口した形跡があるというものであった。また人骨の右足元にあたる玄門部右袖には土師器壺・椀・須恵器壺が置かれており、人骨の左足元には鉄錐・鈴・砾石とともに3本の鹿角製品があった。

この鹿角製品は、角を10cmほどの長さに切って貫通する孔を開け、表面の凸凹をならして面取りしたもので、48号横穴墓被葬者の足元の「瓜状炭化物」の直下に置かれていたものとほとんど同じ形態である。置かれた場所も、被葬者の足元であることからみれば、この横穴墓においても同様なものを入れていた可能性はある。いずれにしても、前庭部土層の所見は、埋葬後に再び前庭部埋土を掘り返して閉塞を開け、墓室内で何事かを行ったことを示しており、その行為が墓室内に遺存した「副葬品」の少なくとも一部と関連していたと考えることができよう。

その時、48号横穴墓と同様に、人骨の二次的移動を行ったかどうかは、人骨の保存が不良であったため、必ずしも明らかではない。しかし、位置が確認された下肢骨は、右脛骨が本来大腿骨のあるべき位置にあり、骨種の同定が正しければ、二次的移動であろう。

また、50号横穴墓は、5世紀後半～末の年代が考えられているが、保存良好な成年～老年男性1体が葬られていた。前庭部土層は、埋葬後閉塞して前庭部を埋めた後、再び掘り込んで開口した形跡を認める。

副葬品は刀子1本のみであり、再開口時の儀礼を思わせるものはないが、人骨にその可能性を認めることができる。すなわち人骨は幅狭で窮屈な姿勢であり、左脛骨は膝関節を外れて外転している。また、左大腿骨は奥壁側に押しやられたようになっており、両膝が接している。脊椎骨も胸椎から腰椎に移行する部分で湾曲する。

報告書執筆の段階ではこの状態を、「人為的な移動ではないと思われる」と記載したが、単体埋葬に対してわれわれのうち田中に先入観があったこと、われわれが48号横穴墓の事例を経験しながら、時間に追われて前庭部土層所見との対応を怠ったためこのような記載をしてしまったものであり二次的に移動された可能性が高いことはいうまでもない。そして、何よりも右膝関節は完全に保存されているにもかかわらず、右膝蓋骨は見当らないのである。

このような人骨所見は、前庭部土層所見とともに考えると、48号横穴墓と同じような、再開口時の入骨脚部の二次的移動が行われていたことを示しているといえよう。そして、これらの事例の時期は、いずれも5世紀後半から末にかけてであり、土生田（1985）が指摘した、わが国における墓室内飲食物供獻儀礼の開始期に相当する。

さて、問題となるのは、これらの飲食物の供獻を行った時期である。埋葬から供獻までの間隔は、正確には明らかにすることはできないが、前庭部土層において埋葬時埋土が安定し、その後の再開口時埋土と明確に判別できる程度の間隔は見込まなければならない。そして、上ノ原48号墓の埋葬時埋土は灰褐色を呈し、風化（黒色化）のきざしをみせていた。

人骨の状態もこれと対応するものであった。すなわち、上ノ原48号墓においては、人骨左肋骨がはね上げられ、右膝蓋骨が足元に移動されていた。人体の軟部組織の腐朽に要する時間は、条件や部位によって異なると考えられ、膝蓋骨については比較的早い時期に移動が可能になると思われるが、胸部については関節を固定している靱帯が腐朽するにはやや長い時間が必要と考えられる。したがって、上ノ原48号墓において飲食物供獻が行われたのは、少なくとも数年を経て後のことであったと考えられる。

幣旗邱古墳1号墳・上ノ原34号墓も、おおむね同様な時期に再開口して飲食物を供獻したと考えいいと

思われるが、他の事例については供獻の時期を示す材料はない。つまり、全ての埋葬において再開口して飲食物を供獻したかどうかについては判断は下せない。しかし少なくともこの時期、死後数年を経て飲食物供獻を行うことがあったことは確実である。そして、この飲食物供獻儀礼が、先学が指摘してきたような「黄泉戸喫」に相当するのであれば（小林1949, 1965, 白石1975）、死の認定には生物としての死後さらに数年の猶予もあったことを物語るものである。

ところで、幣旗邸古墳1号墳・上ノ原48号横穴墓では、再開口時に飲食物供獻だけではなく、遺体の一部を乱すという行為も行われていた。上ノ原34号横穴墓もその可能性は大きく、飲食物供獻が伴ったかどうかは不明であるが、50号横穴墓においても再開口時に人骨の二次的移動を行っていた。二次的移動の部位については、上ノ原48号横穴墓が膝蓋骨と左胸部、34号横穴墓と幣旗邸古墳1号墳は脛骨、上ノ原50号横穴墓では下肢（膝蓋骨・脛骨）であった。上ノ原48号横穴墓における胸部人骨の乱れについては飲食物供獻時の偶発的なものである可能性が高い。つまり、意図的に行ったのは脚の二次的移動ということになろう。

このような一種の遺体毀損は、通常「断体儀礼」として認識される。しかし、上ノ原横穴墓群および幣旗邸古墳1号墳の事例は、いわゆる「断体儀礼」とは異なり、死後数年をへて行われている。つまり通常の「断体儀礼」と異なり、埋葬時に死者の靈魂（あるいは惡靈）を封じ込めたわけではない。すなわち被葬者の「生物的死」後、さらに数年をへた後に再び墓室を開口して、死者の靈力を封じ、その歩行機能を停止するために、脚を中心とした人骨の二次的移動という行為が行われたのではないかと考えられるのである。また、この行為は、好条件の遺構でしか確認できないが、6世紀後半～末において顕著となる集骨・改葬・人骨の内配置に連続すると考えれば、古墳時代後半期に一般化していくものであったということができるよう。

以上、幣旗邸古墳1号墳の人骨をめぐり、隣接する上ノ原横穴墓群の事例を用いつつ考察を行ってきた。これ以上の議論については、別稿（田中・村上1994）を参照していただければ幸いである。

《文 獻》

- | | |
|-----------|--|
| 生田純之 | 1985「古墳出土の須恵器（一）」「未永先生米寿記念叢書論文集」吉川弘文館、東京 |
| 小林行雄 | 1949「黄泉戸喫」『考古学雑刊』二 |
| 小林行雄 | 1965「古墳文化論考」平凡社、東京 |
| 裕川昭平 | 1993「炭化植物の同定について」「上ノ原横穴墓群II」大分県教育委員会、大分 |
| 村上久和 | 1993「上ノ原横穴墓群における葬送儀礼の諸相」「上ノ原横穴墓群II」大分県教育委員会、大分 |
| 大分県教育委員会 | 1989「上ノ原横穴墓群I」大分県教育委員会、大分 |
| 大分県教育委員会 | 1993「上ノ原横穴墓群II」大分県教育委員会、大分 |
| 白石太一郎 | 1975「ことどわたし考」「櫻原考古学研究所論集創立三五周年記念」吉川弘文館、東京 |
| 田中良之・村上久和 | 1994「墓室内飲食物供獻と死の認定」「九州文化史研究所紀要」39 |

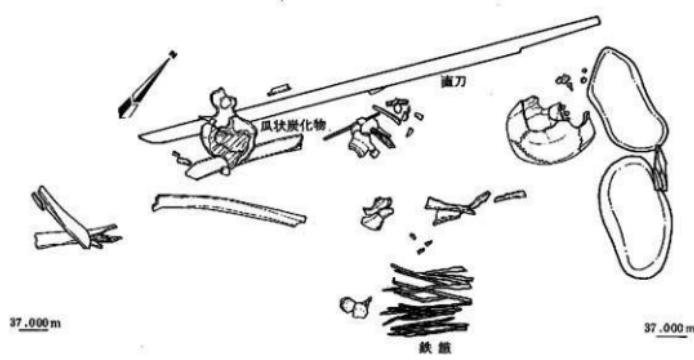


图9 带旗邵古墳1号填人骨出土状况 ($S = 1 / 10$)

0 50cm

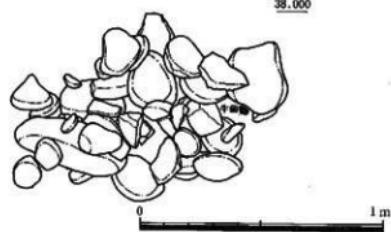
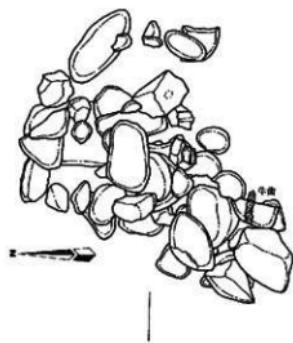


图10 带旗邵古墳1号填家牛骨出土状况 ($S = 1 / 20$)

第V章 幣旗邱古墳1号墳出土の家牛 (*Bos taurus*) 齒・ 家犬 (*Canis familiaris LINNAEUS*) 骨

桃崎祐輔

1. はじめに

幣旗邱古墳1号墳は山国川東岸台地上に位置する直径20mの円墳で、墳頂部の集石造構より牛歯列、封土中から犬下顎片が検出されている。当古墳は埋葬施設の構造や直刀・鉄鎌の型式、隣接する2号墳の年代観より5世紀末ごろの築造と推定され、出土した家畜骨も同時代のものと考えられる。本論では家牛歯・家犬骨の所見を報告するとともに派生する問題について若干の考察を試みたい。

2. 出土状態 (図10)

古墳頂下の封土中、墓壙掘方の肩口に接して2段からなる集石造構が検出され、上下の集石に囲まれたような状態で牛の左上顎臼歯一列が出土している。集石付近には熱変の痕跡が見られ、周間に少量の骨片が認められた。また封土中からは犬右下顎骨片も検出された。

牛臼歯は歯根部を上に一列に並んで検出され、頬骨が付着していたことから頭蓋骨に植立していたと考えられる。集石の状況から判断して本來頭部のみであった可能性が高く、集石内に空間を設けて牛頭を正面に安置し、上面を礫で覆っていたらしい。埋没位置が浅かったため植物根の侵入や雨水の浸透で頭蓋骨の大部分が風化消失し、左上顎部のみが遺存したものであろう。牛歯の直上にも礫が乗っていたが、牛頭の腐朽で空洞が生じ、土圧で上部の礫が落ち込んだものと考えられる。

3. 出土牛歯・犬下顎の所見 (図11)

筆者が柴燒窓氏から出土資料を借り受けた時には既に幾つかの歯が遊離したり破片となっていたが、周囲の土ごと取り上げられたものは本来の植立状況をとどめていた。臼歯は検出時に歯根部をわずかに破損しているが、保存状態は非常に良好で硬化処理も不要であった。

出土した牛臼歯はいずれも左(L)上顎臼歯で、第二前臼歯(P²) 第三前臼歯(P³) 第一後臼歯(M¹) 第二後臼歯(M²) 第三後臼歯(M³)などとともに前臼歯1本分の破片があり、これは第一前臼歯(P¹)の可能性が高い。また頭蓋骨片も少量存在する。

L P¹は葉片および内部褶襞片よりなり、内部褶襞片の基部には微細な歯根が認められ、前葉側は二根、後葉側は单根となっている。

L P²は歯冠長16.9mm、幅17.2mm。前葉側の咬耗が進んでいる。後葉の頬側は長く伸び、先端は鋭角をなす。歯根部は取上げ時に基部から折損しているが、破断面の観察によれば頬側は2根で後根が平たい板状をなす。舌側では中央部に癒着した2核があるが根腔は完全に独立しており先端は二又に分岐していたと考えられる。

L P³は歯冠長15.9mm、幅19.2mm。咬合面には軽度の咬耗が見られる。頬側前葉部には僅かな凹みがあり、P²の後葉端とちょうど咬み合う曲線を描いている。歯根は先端を折損しているが遺存状態は良好で、頬側は2根よりなる。舌側は中央部の单根のみからなり、破断面には半月形を呈する根腔が一つだけ観察できる。

L M¹は歯冠長23.35mm、幅23.1mm。咬合面には僅かに咬耗が見られる。舌側の葉境には釘状結節を生じている。歯根はやや風化しており、頬側は2根よりなる。舌側は2根の基部が癒着して板状となっており、

つぶれた形状の2つの根腔が認められ先端は二又に分岐していたと考えられる。また歯根部の舌側には頬骨若干が付着している。

L M²は歯冠長26.75mm、幅22.75mm。咬合面にはほとんど咬耗が見られず、エナメル質が非常に明瞭である。舌側の葉境には釘状結節を生じているが、セメント質に半ば埋没している。歯根は先端が風化して失われている。頬側は2根よりなり前根は断面L字形、後根はコの字形を呈す。舌側は2根が癒着して屏状となっており、つぶれた形状の2つの根腔が認められ先端は二又に分岐していたと考えられる。また後葉の頬側には頬骨の歯槽部若干が遺存しておりM³に連結している。

L M³は歯冠長29.85mm、幅19.6mm。咬耗は咬合面前葉では殆ど認められないが、後葉ではやや進行している。舌側葉境の谷間は厚く沈したセメント質によって埋没している。歯根は端部が折損している。頬側・舌側とも2根よりなるが、後葉の両根は一部で癒着し、入り組んだ複雑な形状を呈している。また頬側には頬骨若干が遺存している。

以上の頬歯は一連のもので同一個体の上顎左側歯列弓を構成していたと考えられる。第二・第三後臼歯以外が離脱していたため歯冠列長は不明であるが、P³～M³間の長さは12cm程度に復元され、少なくとも全長13cm前後はあったと考えられる。また歯列弓の弓状度はさほど高くなかったようである。

上記の資料について鹿児島大学の家畜解剖学教室で計測および年齢・体高の推定をお願いしたところ、性別は不明であるが7才前後、体高118～122cm程度の在来型牛で、吐喝喇叭の口之鳥野生牛に近い形質であるとのご教示を受けた。在来牛や黒毛和牛の白歯標本と比較すると、外国種と交雑している黒毛和牛の白歯は側面がのっぺりした印象を受けるのに対し、幣旗邸古墳1号墳家牛や口之鳥牛の白歯は結節の発達が顕著で木の根茎のように膨れしており、両者の差は厳然としていた。

家犬骨は右(R)下顎の破片で、第一後臼歯(P₁) 第二後臼歯(P₂)が植立し、第三後臼歯(P₃)は抜けて失われている。前臼歯列を含む吻部を欠損しており、全体の形状は不明であるがP₁の歯冠長が21mmに及ぶので、中型犬の骨であると考えられる。

4. 古墳に伴う牛の供犠

(1) 日本列島

混入を除外すると列島では100ヶ所前後の古墳から馬歯・馬骨の出土例があるが牛歯や牛骨の出土例は少ない。直良信夫氏や佐伯有清氏らは古墳に対する牛供犠の可能性を指摘している。

五島福江島の大浜遺跡(長崎県福江市大浜町)では2・5・6・7号墓の4埋葬人骨に牛白歯を副葬していた。弥生中～後期の上器、土師器、須恵器などを伴出し、弥生中期～古墳時代まで継続した墓地と考えられる。資料を再検討した金子浩昌氏によれば、破碎された牛馬骨を含むという。近年馬歯約160本が出土し、C¹⁴年代でA.D.40という数値が得られている。

伊皿子貝塚2号方形周溝墓(東京都港区三田)は四隅に陣橋を有する一辺10m程の規模で西溝北端の小土壇より牛頭骨1個体分を検出している。土壇底に頭蓋骨を据え、その上に下頸骨を置いており、墓に対する供犠と考えられる。弥生中期末(宮の台式期)のものとされている。

長瀬高浜24号墳(鳥取県東伯郡羽合町)は径14mの円墳で周溝内から多数の供犠須恵器を検出し、周溝上面より1～1.5才の幼齢牛歯・骨、成牛歯3が出土している。6世紀後半に築造され7世紀まで追葬が行われたものと推定される。

四条畷町D古墳(大阪府四条畷市)は横穴式石室内より牛の下顎右乳臼歯3、左乳臼歯1、馬の左下顎臼歯6点が出土している。6世紀中葉以降のものと思われる。

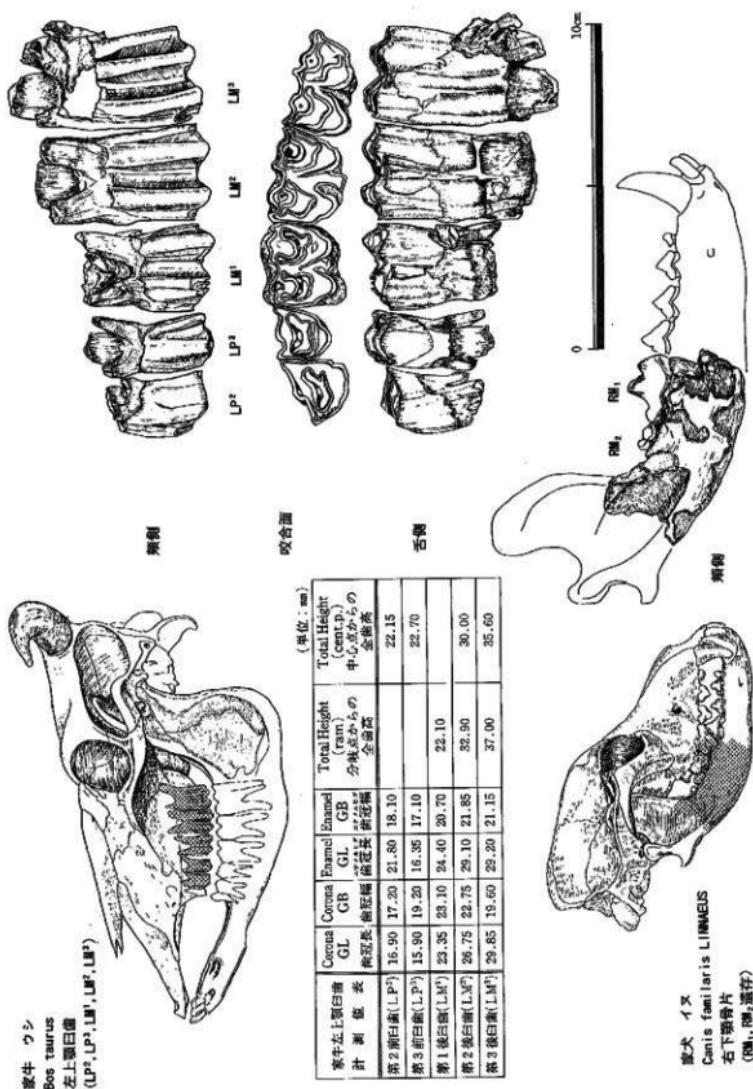


図11 常熟縣古墳1号墳家牛齒・家犬齒実測圖

長峯1号墳（長野県佐久市内山）は長径9.1mを測る円墳で、横穴式石室内部より人骨、幼齢馬下顎骨、牛？臼歯1が出土している。石室構造より7世紀後半の築造と推定される。

蓼原古墳（神奈川県横須賀市）は全長28mの帆立貝式古墳で、周溝内の埴輪倒済層の上面を馬骨数個体、牛骨2個体、犬等の獸骨を含む薄い包含層が被覆し、その直上に須恵器の大甕3個体分の破碎片をタイル状に敷き詰め、須恵器甕、鉄製刀子を伴う。埴輪は6世紀中葉を示すが、牛馬骨直上の須恵器は7世紀中葉以降のもので時間差があり、あるいは追善供養のようなものか。

（2）朝鮮半島

『三國志』韓傳には「其葬有棺無槨不知采牛馬 牛馬盃于送死」とあり、3世紀の韓南では葬礼に際し牛馬供犠が行われたらしい。高句麗城では紀元前後～2世紀頃の築造と推定されている慈江道楚山郡の蓮舞里2号墳（四隅突出形墳）から子牛・鹿の大脛骨、豚足骨を出土している。また平安南道大安市の徳興里壁面古墳（408頃）は好太王治世の幽州刺使・領の墓で、前京の墓誌銘末尾の吉祥句に「牛羊酒穴米粲」とあり牛羊の肉を賞味し酒盛りする状景が窺える。

伽倻の林洞堂古墳群（慶尚北道慶山市）は5～6世紀の墓より牛・馬・犬などの骨が出土している。新羅城では慶州の皇南大塚南墳（5世紀前半）の封土内から大甕に内蔵された大型獸骨が出土しているほか、智証王の癸未年（503年）に建立された冷水碑（慶尚北道迎日郡神光面）・法興王の甲辰年（524年）に建立された鳳坪碑（同道蔚珍郡竹辺面）にはいずれも王・六部の代表者が裁定し、その際に牛を殺して誓約儀礼を行ったという内容が記されている。

（3）中国東北地方

列島の古墳時代に騎馬風習・装身具など多大な文化的影響を与えた慕容鮮卑の葬礼では、死者に対して来世への乗物や死後の食物として馬・牛・犬などを殺して捧げる風習があった。遼寧省朝陽県の十二台馬廻廠墓（土墳木棺墓）は豊富な金製装身具を伴う前燕建国以前（3世紀）の慕容鮮卑の墓で、墳龕に牛骨・陶尊が削葬されていた。こうした習俗は五胡十六国時代（304～439）の鮮卑系諸王朝の葬礼にも受け継がれ、河南省安陽県の孝民屯墓（前燕、4世紀中葉）では土壇木棺墓の頭部側小口の壁龕に牛腹骨と陶罐・陶壺を供獻する墳墓が5～6基検出され、うちM154号墓では金銅製馬具に覆われた人骨を囲んで壁龕に牛骨・右足付近に馬頭・犬頭が供えられていた。遼寧省北票県の馮素弗墓は墳丘内に2基の墓葬があり、1号墓は415年に没した北燕の王族馮素弗の墓で木棺を収めた石室外の壁龕に陶罐・陶壺がおかれて、その上に牛の腹骨と肋骨が置かれていた。2号墓は大人墓で火骨大小2頭分が出土している。

5. 結 語

以上のような類例の存在より、幣旗邸古墳1号墳出土の牛齒は供犠の痕跡と推定される。また近年弥生～古墳時代の墳墓に犬の供犠を伴う例が若干報告されており、家大骨についても供犠痕跡の可能性が高い。こうした家畜供犠は近接する時期の中国五胡十六国・朝鮮半島の墓葬にしばしば見られ、列島の事例はその影響下にあるものと推定される。幣旗邸古墳1号墳ではいかなる経緯でこの習俗が採用されたのか興味ある問題である。全国的にも出土状態の詳細が記録され、遺構に伴うことが明らかな古墳出土例は稀であり、栗焼彦氏らの慎重な調査と適正な処置が当資料の発見につながったことを喜びたい。資料の観察と報告の機会を頂いたことに感謝いたします。また本稿の作成にあたり、鹿児島大学農学部家畜解剖学教室の西中川駿先生に獸骨鑑定法や参考文献を御教示頂き、同獣医学科の日高祥信氏に牛齒の計測・年齢・体高の推定をお願いした。あわせて御礼申し上げます。

第VI章 ま と め

以上述べたとおり、幣旗邱古墳1号墳は、「石棺系竪穴式石室」とも称すべき主体部を有する円墳であることが理解された。構築時期については主体部の特徴と、副葬されていた鉄器の形式、周辺の状況などから見て、五世紀末頃として大過ないものと考えられる。そしてその特徴は、「飲食物供獻儀礼」にかかる痕跡が良好な状況で検証し得たことと、牛齒の出土により古墳構築過程で、「牛の供犠行為」が行われたことを明らかにできた点にある。このうち、石室内の人骨の出土所見の分析による「飲食物供獻儀礼」についてと、「牛の供犠行為」については別稿に詳しいので、ここでは「食物供獻儀礼」にかかる補足を、調査所見によって行いまとめとしたい。

まず、「食物供獻儀礼」を補足する材料として、二つの点が指摘できる。一つは墳丘土層面の観察によつて理解される、第一次墓壙ラインと第二次墓壙ラインのもつ意味であり、今一つは石室の石蓋に見られる特徴である。

第一次墓壙ラインが埋葬行為に際し生じたことは、ほぼ疑いようのない事実として捉えることができる。それは南北セクションに見られるように、第一次墓壙ラインと墓壙の掘り方ラインが一致することで、ある程度構築が行われた墳丘は、埋葬時には墓壙に沿って開口していたことを意味する。

また、主体部構築に伴う充填土に表土が混入していないことは、墳丘構築に先立つて主体部を構築したことと示している。つまり、この第一次墓壙ラインは主体部構築によるものではなく、埋葬行為によるものと考えるべきで、土層による解釈はそれを傍証している。とすれば、第二次墓壙ラインはどう解釈すべきか。第一次墓壙ラインが埋葬行為に伴うものとすれば、第二次墓壙ラインは埋葬行為の後、何らかの意図をもって墳頂部から掘り込まれたと考えなければならない。ここで注目しなければならないのは、石室を覆う石蓋に見られる特徴である（図5）。

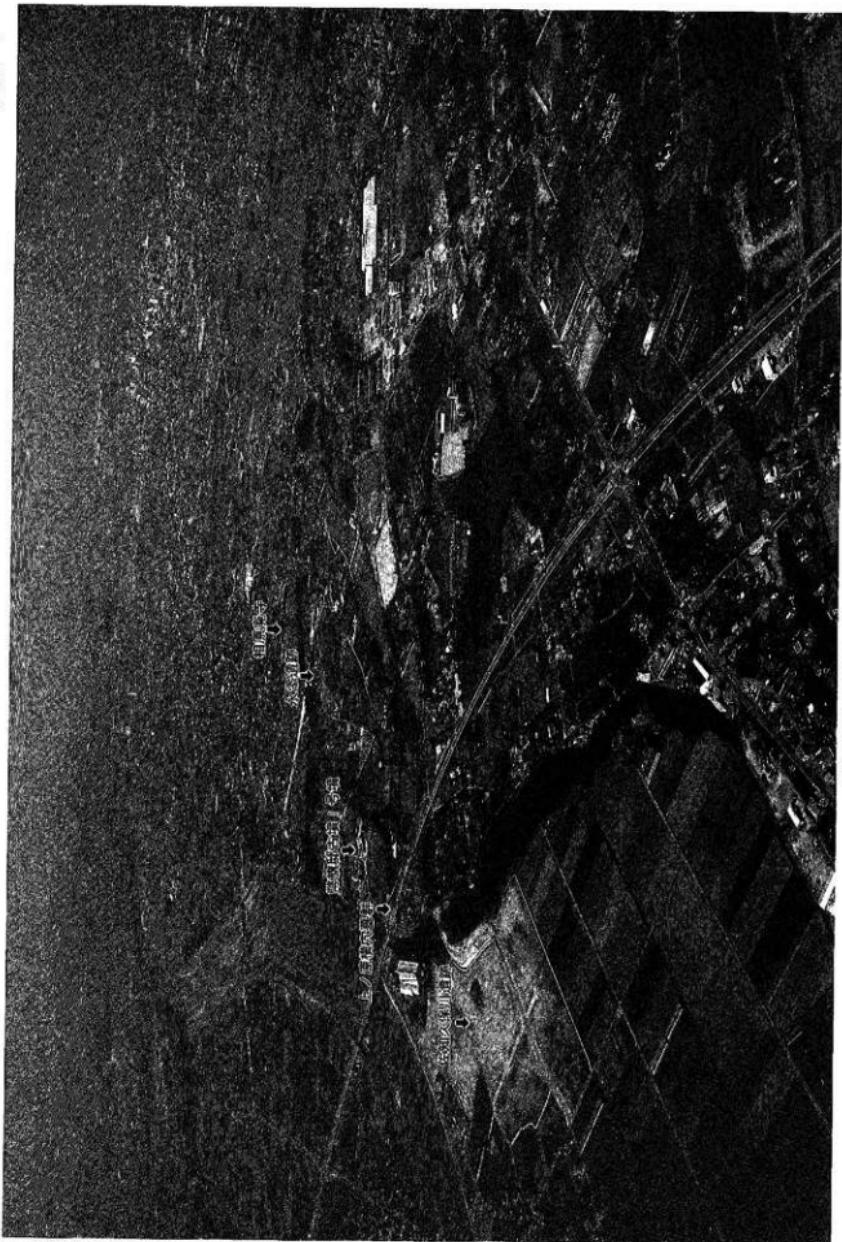
前述のように、石蓋は鉄平石を用い、鉛重ねにより頭部から順に置かれている。しかし、細かくその様子を観察すると、丁度石室の上半分（B・C・D）については、微妙に重ね方が違うことが解る。さらに使用される石材はB～Dと、A・E～Jは明らかに別の石材で、一連の流れとして不自然な印象を受ける。仮にB～Dの石蓋を除去すれば、そこに「ヒョウタング状」植物遺体を見ることができ、第二次墓壙ラインはあたかも、石蓋のみを取り出すように掘り込まれている。

この様にして幣旗邱1号古墳の埋葬行為を見た場合、第IV章で述べられているように、「飲食物供獻儀礼」の実施を強く感じさせるのである。そして、同様の行為が、わずか数メートル離れた上ノ原横穴墓群（48号墓）でも同時期に行われていることは、その可能性をさらに高めるものである。

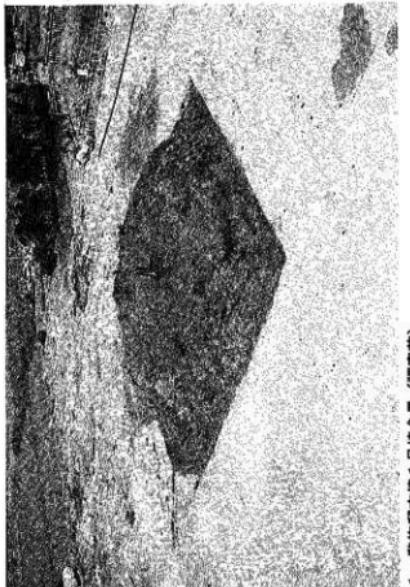
当時、こうした行為が普遍的に行われたものか、それとも地域的な特性であるのか、現時点で積極的に言及できないが、「牛の供犠行為」や、豊前という半島的要素の強い地域性を指摘するとき、そこに幣旗邱古墳1号墳に葬られた人物が見えるように思える。

〔参考文献〕

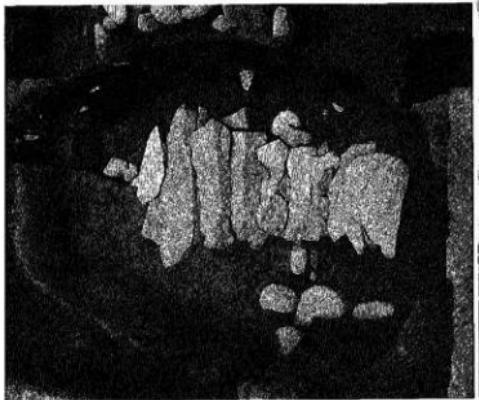
大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群I～III」(I)・一般国道10号線中津バイパス那羅文化財発掘調査報告(2)～(4)I、1989～1991)



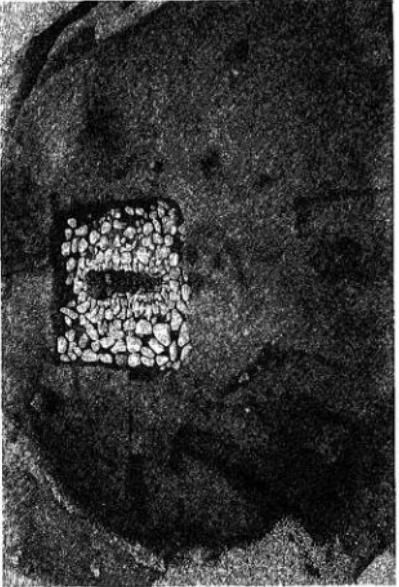
特許母古第1号城周辺地形（南側上空より）



1. 主体部全景（南西より）



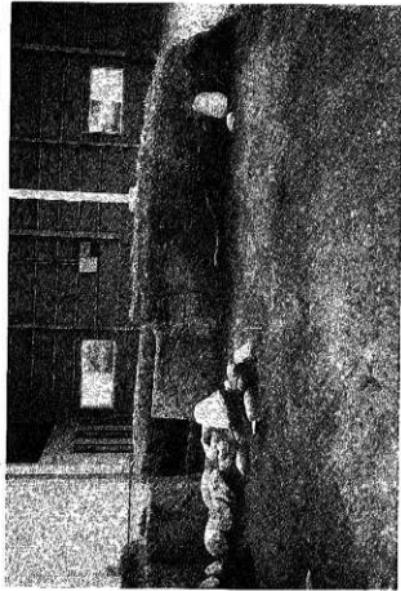
3. 第二次墓築及び石塀突出状況



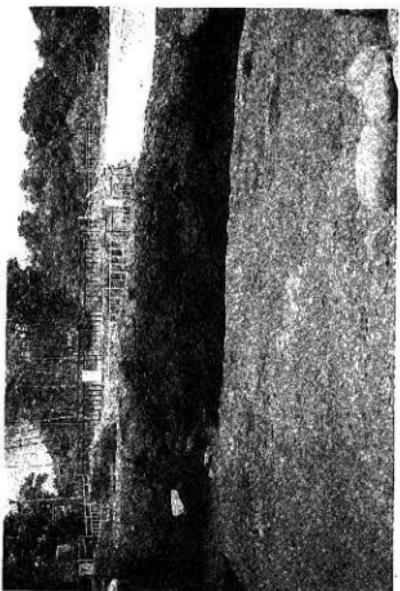
4. 第二期墓築土層断面（塊石塀側とその違いを明確に示している）



3. 第二期墓築及び石塀突出状況

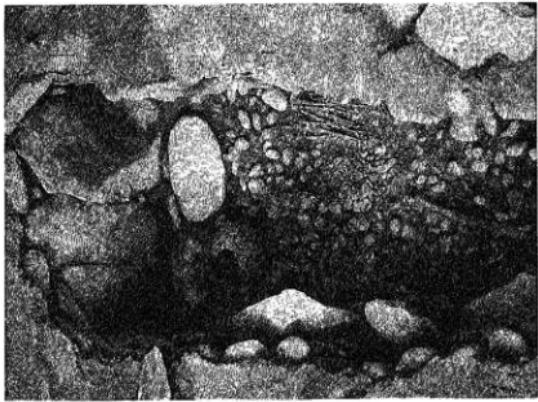


1. 墓丘土層断面（主体部主軸方向・東南より）



2. 墓丘土層断面（主体部横軸方向・南西より）





1. 石室內遺物出土狀況（全景）

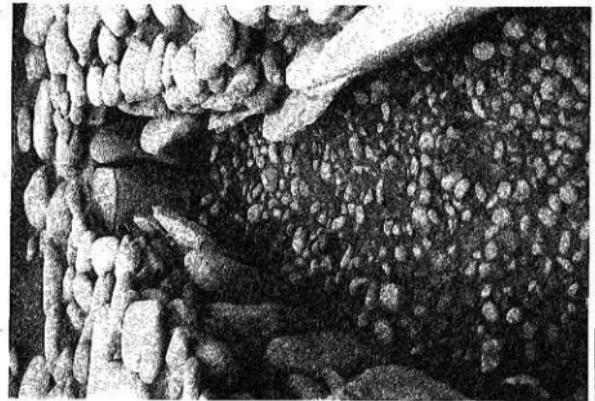


3. 「圓柱形水道」出土狀況

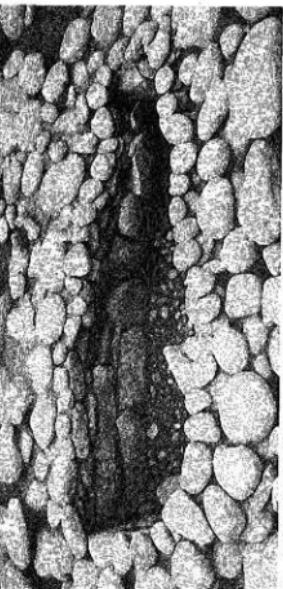
2. 石室內遺物出土狀況（上半）



4. 人骨、遺物出土狀況

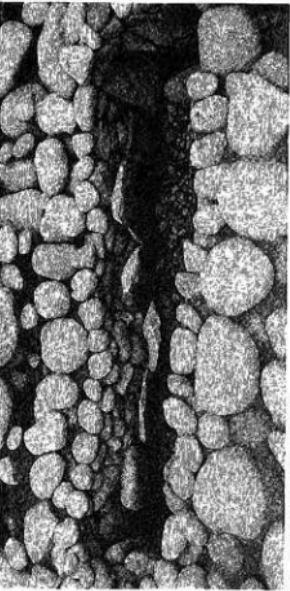


1. 石室内（頭部小口方向）

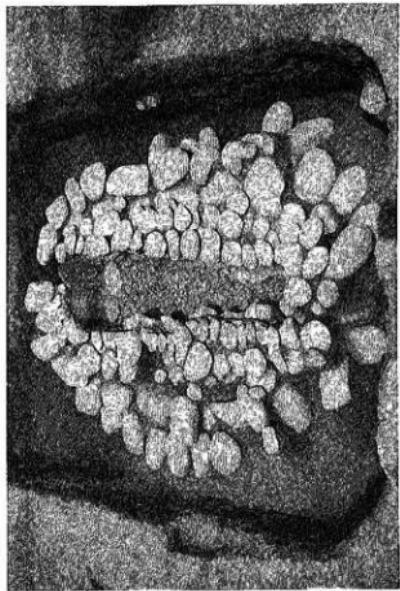


3. 石室内側面（南東方向）

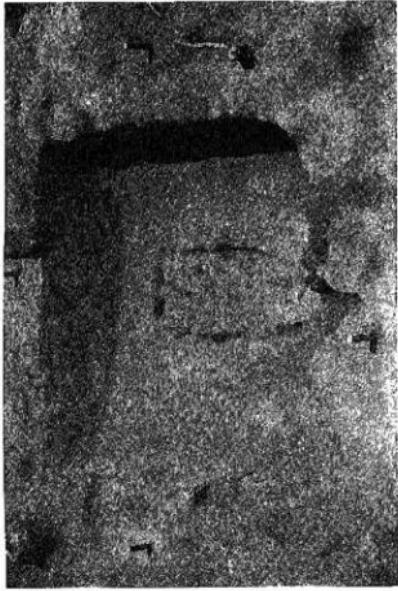
2. 石室内（頭部より足位小口方向）



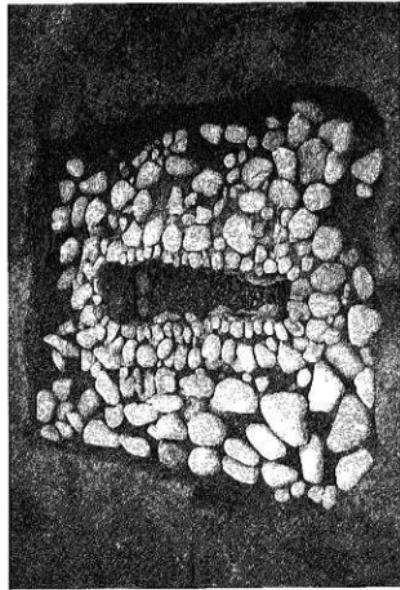
4. 石室内側面（北東方向）



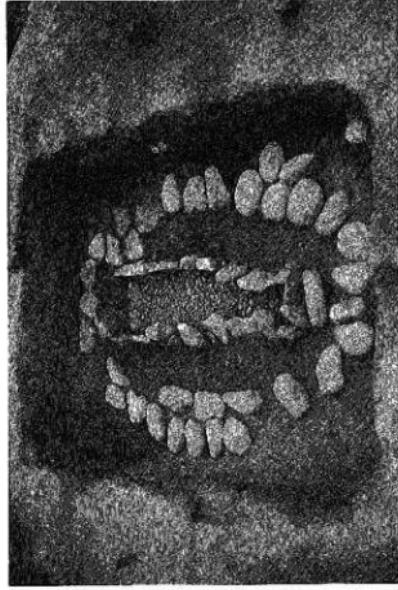
1. 主体部全景（埋葬時）



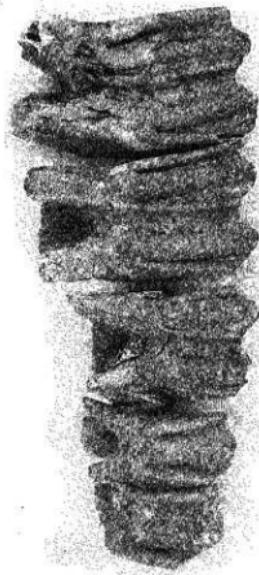
2. 主体部全景（産え指の状況）



3. 主体部全景（土被層除去後）



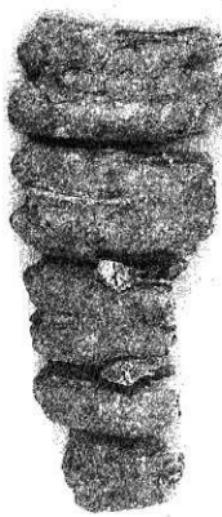
4. 主体部全景（基質剥離後）



頸側

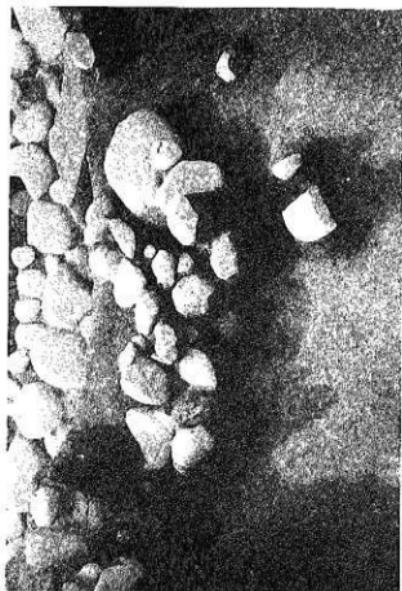


咬合面



舌側

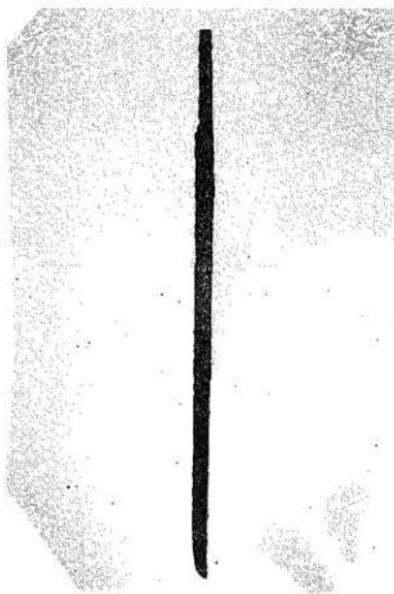
3. 家牛齒



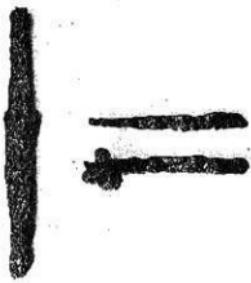
1. 家牛齒を伴う集石遺物



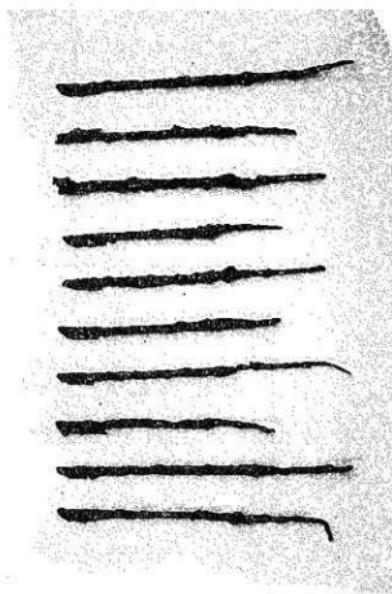
2. 家牛齒出土状況



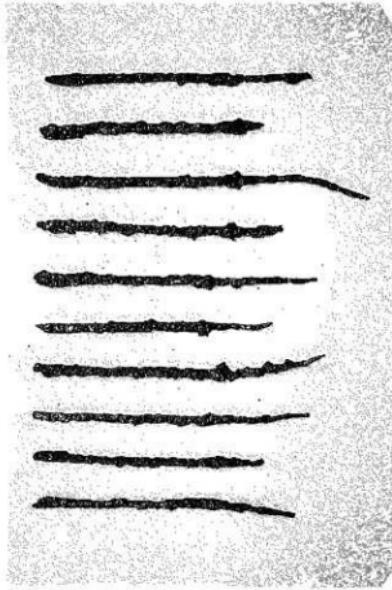
1. 出土遺物（直 矛）



2. 出土遺物（刀子、劍子？）



3. 出土遺物（鐵綫 1）



4. 出土遺物（鐵綫 2）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいはたていこふんいちごうふん							
書名	弊旗邱古墳1号墳							
副書名	大分県中津市大字相原8265-32番地所在遺跡の調査							
卷次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	栗焼 薫児							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市大字相原8265-32番地							
発行年月日	1995年8月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弊旗邱古墳	大分県中津市 大字相原 8265-32	44203	101063			19890424 ～0807	100m ²	工場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
弊旗邱古墳1号墳	古墳	古墳時代	円墳	直刀、鉄鎌、刀子 瓜状炭化物、人骨 家牛齒、家犬齒	石棺系竪穴式石室			

弊旗邱古墳1号墳

発行 中津市教育委員会

中津市文化財調査報告

大分県中津市豊田町14-3

第16集

印刷 明治印刷株式会社

1995年8月31日

大分県宇佐市大字長洲坂の下